

●最優秀賞

追究意欲を高める 地域教材の開発と 学習活動の工夫

熊本県玉名市立有明中学校 いのうえゆういち
井上裕一



〈概要〉

本研究は、昨年度に取り組んだ中学校社会科地理第1学年「身近な地域の調査～玉名市の土地利用の変遷～」における授業実践についてまとめたものである。地域素材として、熊本県玉名市の有明海沿岸における干拓事業や耕作放棄地の事象を取り上げた。

単元の前半では、干拓前後の地形図の比較を通し、国営干拓事業が米の増産や米自作農の創設などを目的に多くの労力を費やして進められてきたのにもかかわらず、事業完成後の干拓地が畑として利用されていた事実を取り上げる。その背景について、昭和の食料増産や米の生産調整といった国の事業や政策と関連づけてとらえさせていく。

さらに単元の後半では、玉名市の増大した農地は、現在、耕作放棄地の増加の課題を抱えていることを見学や資料からつかませる。そして、耕作放棄地再生プランを作成し、玉名市へ提案することを通して将来的な農業の在り方について考えさせる。

このような学習の展開を通し、生徒の追究意欲を促すとともに、地域に愛着をもち社会へ参画する態度を育てていきたい。

I はじめに

今回の学習指導要領の基本的な考え方の一つに、基礎的な知識・技能の習得が挙げられている。これは単に知識を注入して覚えさせるような授業を示しているのではない。

しかしながら、中学校社会科においては、生徒たちの思考を深める手立てなどの指導方法の改善が十分になされず、生徒の興味・関心を考慮しない網羅的に知識を伝達する授業が多く見られる。そうした背景の一つに、中学校社会科における基礎的知識とは、網羅的な学習を通して身につく個別的な知識であり、まずは、それらを習得させなければ生徒が自ら考えたり判断したりすることはできないとされていたことが考えられる。

本来、社会科は、学習課題に対して自らの生活と結びつけて、経験をもとに考えたり友達と話し合ったりして、考えを深めていく教科である。つまり、生徒自ら課題をもち、その解決のための追究過程を通じて知識・理解を深め、問題解決能力を身につけていくような授業が求められているといえる。

そこで、そうした社会科授業を創造するために、教師がいかに関心意欲を刺激し、学習活動を支えていくのかに焦点を当て、本研究主題を設定して授業実践に取り組んだ。

II 研究の視点

1 地域教材の開発〔視点1〕

(1) 小・中学校の関連

地域教材では、観察や調査を行うことができ、具体的な事象と生徒の体験や意識とを結びつけやすい。こうした地域教材の活用については、小学校においても社会科や総合的な学習の時間を中心に様々な学習で行われている。

そこで、小学校の既習内容との関連を図り、中学校社会科でさらに発展的な地域教材の開発を行い学習展開を工夫することで、よりいっそう効果的に地域に対する関心を高めていくことができると思う。また、既習の地域教材を新たな視点から追究することで、身近な地域に対する知識の再構成を図ることができると思う。

(2) 社会参画の視点

今回の学習指導要領の「身近な地域の調査」では、新しく「地域の課題を見いだし地域社会の形成に参画しその発展に努力する態度を養う」ことが記されている。

そこで、地域の地図の読み取りや校外での観察から市の課題をとらえさせ、課題を改善するためのプラン作りを位置づける。プランの作成を通し、互いに議論を深めたり、実際にプランを市へ提案したりすることで、互いの見いだした課題を同じ地域に住む自分たちの課題としてとらえ、地域に対する関心や理解を深めていくことが期待できる。

2 問題意識を高める学習課題の設定〔視点2〕

生徒のより確かな知識・技能を自ら獲得していくようにするために、生徒自身の追究意欲を高めることは必要不可欠である。そこで、次のような学習課題を設定する。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 追究への必然性が生じるもの。 (2) 既存の知識や経験を生かしながら追究できるもの。 |
|---|

(1)の追究への必然性が生じる学習課題とは、

「なぜだろう」「納得できない」等、生徒が既にもっている常識的な認識を覆すような学習課題のことである。

(2)の既存の知識や経験を生かしながら追究できる学習課題とは、「どうなるか」「どうすべきか」等、生活経験に基づく知識やこれまでに身につけた調査方法や学習内容を活用することで追究の見通しが立てられるような学習課題のことである。

このような学習課題の追究を通し、生徒それぞれの生活経験や学習経験をよりどころにして、興味・関心を高めながら、自分なりの考えを生み出し、基礎的な知識・技能をより確かなものにしていくと考える。

3 生徒相互の交流を促す学習活動の工夫〔視点3〕

学習課題の追究過程において、獲得した知識や解釈を、他者に対し自分なりの言葉で説明したり論述したりする活動を効果的に位置づけることにより、生徒たちは学習への成就感や達成感を高め、主体的に学習を進めていくことができると考える。

そこで、他者との交流場面において、今までに獲得した知識や技能を使って社会的事象について説明する学習活動を設定し、次のような三つの手立てを行っていく。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 教材・教具の提示方法の工夫 (2) 個や集団の思考を深める場の工夫 (3) 教師の見取りに基づく支援 |
|--|

III 学習の指導計画

1 単元名 第1学年「身近な地域の調査 ～玉名市の土地利用の変遷～」

2 単元のねらい

本単元は、身近な地域の観察や調査を通じて、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深め地域の課題を見いだし、地域社会に参画しその発展に努力しようとする態度を

養うとともに、地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方の方法の基礎を身につけさせることをねらいとしている。

3 指導計画

本研究で述べる単元の構想を資料1に示した。

IV 指導の実際

1 地域教材の開発〔視点1〕

(1) 小・中学校の関連

本単元における対象地域を有明中学校区及び玉名市とし、干拓事業を素材として取り上げ、土地利用の変化を通じた地域の特徴についてつかませる。玉名市の有明海に面した地域は、四百年もの歳月をかけた干拓事業によって得られた平地である。江戸時代の加藤清正による干拓から昭和の国営干拓事業にかけて、広大な農業用地を獲得している。本校区はこの干拓平野の中心に位置しており、「イチゴ」「トマト」等が特産物として生産され、県内でも有数の農業地帯となっている。こうした干拓に関する教材は、小学校の社会科や総合的な学習の時間で取り扱われている。また、明治時代からの干拓堤防・樋門が、延長約5.2kmにわたり残存している「旧玉名干拓施設」は、平成22年6月に国指定重要文化財（資料2）となり、児童・生徒の関心が高まっている。

そこで、本単元前半に国営干拓事業が進められてきた背

景や干拓後の土地利用の変化についての学習を位置づけ、小・中学校間や他教科間での学習の効果的な関連を図った（資料1）。

(2) 社会参画の視点

単元後半では、干拓後の玉名市の様子についてとらえさせる。玉名市では米価の低下や農業従事者の減少等により、耕作放棄地の増大が大きな課題とされ、特に土壤整備が難しい菊池川

学習活動	時間	主な学習課題と教師の指導・支援	関連教材
1 干拓の歴史や仕組みを知る。	1	○ 立体地図や見学したことをもとに、江戸から昭和にわたる干拓の歴史や干拓の仕組みについてつかませる。	〈小学校3年総合〉 ・立体地図作成 〈中学校1年総合〉 ・干拓施設見学
2 国営干拓事業の背景について考える。	1	○ 国営干拓事業が米増産、自作農創設等の目的で進められてきたことを資料からつかませる。	〈小学校4年社会科〉 「農地開発に尽くした人」 ・潮害との闘い
3 干拓で土地利用が変化した原因を地形図やグラフから読み取り、干拓後の玉名市の変化についてまとめる。	2	○ 米の生産量過剰により、生産調整（転作・減反）が行われたことを資料から読み取らせる。 ○ 干拓後の玉名市の発展について考えさせる。	〈小学校3年社会科〉 「トマト農家の仕事」 ・肥沃で広大な干拓地 ・農家の努力
4 現在の玉名市の課題について、ゲストティーチャー（GT）の話や見学をもとに考える。	3	○ 統計資料から農業産出額の減少、経費の増大、農家の高齢化等により耕作放棄地が増加している問題をつかませる。	〈小学校5年社会科〉 「農業のさかんな地域」 ・生産調整 ・農家数の減少
5 耕作放棄地増加の改善策を考え、玉名市の耕作放棄地再生プランを市へ提案する。	6	○ 耕作放棄地増加の影響について考えさせる。 ○ 耕作放棄地の原因、改善方法、プラン実行の効果の3点についてプランを検討し合わせ、玉名市へ提案させる。	〈小学校5年社会科〉 「これからの食料生産」 ・自給率 ・環境への影響 〈中学校社会科公民〉 「私たちが生きる現代社会」 ・少子高齢化 「地方の政治と自治」 ・まちづくりの調査

●資料1／単元の構想（13時間扱い）



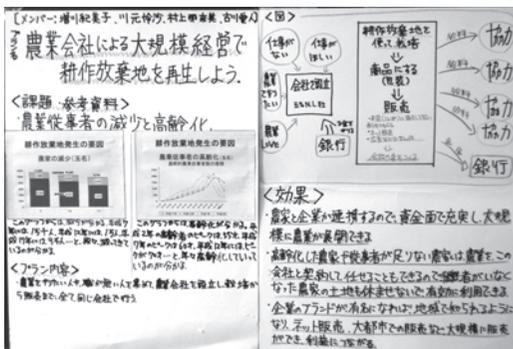
●資料2／旧玉名干拓施設（熊本日日新聞H22.4.17）



●資料3 / プランの検討
(熊本日日新聞 H21.10.17)

の上流域や山間部での増加が著しい。

そこで、玉名市の耕作放棄地再生プラン作りに取り組ませ、耕作放棄地の原因となっている問題、その改善策(プラン)、プラン実施の効果の三つの点から検討した(資料3)。その後、互いに指摘し合った問題点の修正を行い、作成したプラン(写真A)を玉名市農業委員会、熊本県農業振興課に提案した(写真B)。後日、玉名市よりそれぞれのプランのよさや課題についてまとめた評価の詳細をいただくことができた(資料4)。



●写真A / 市へ提案した耕作放棄地再生プラン

耕作放棄地再生を考える

玉名市 有明中

玉名市大浜町の有明中で15日、校区内の耕作放棄地について考える授業があり、生徒が再生プランを発表した。

1年2組の社会科授業で、校区に広がる耕作放棄地の恵みや課題を考えた計画。県の担当者などから耕作放棄地について説明を受け、生徒が対策を考え、再生プランを発表した。

耕作放棄地の再生プランを説明する有明中1年2組の生徒＝玉名市の有明中

ンを発表。「サツマイモを栽培する」として「まるとん」と呼ぶ。農業家は「地産地消」な会社による大規模経営を提案した。

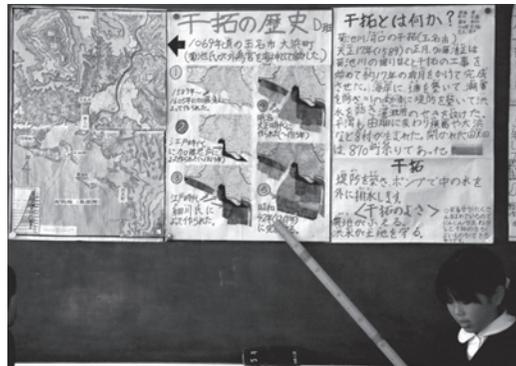
営」とした案は「農家田が増え家離れも減少する」として「まるとん」と呼ぶ。農業委員会で評価してもらい、さらに学習大とPRの案では水を深める。(津山裕)



●写真B / 耕作放棄地再生プランを市へ提案

プラン名	サツマイモ栽培で耕作放棄地を再生しよう
メンバー	
課題	資料の価格の上昇により農家が減り耕作放棄地が増えている
プランの内容	耕作放棄地の再生＝営農再開＝消費
事業効果	地産地消
	感想及び意見
(良かったところ)	<ul style="list-style-type: none"> プランの内容が具体的に表現されているところ。 地産地消によりコストの削減、新鮮な食物を食べられることに気づいているところ。
(もう工夫など)	<ul style="list-style-type: none"> 栽培が容易なサツマイモに着目したところは非常に良いが、これに消費の方法を検討していればもっと内容が充実したものになったと思う。 せっかく事例を挙げているので、その辺をプラン内容に盛り込んで欲しかった。

●資料4 / 市農業委員会からのプランに対する評価



●写真C / 「干拓地では、栄養分が豊富で農作物がよく育ちます」(本校区にある大浜小学校で取り組んだ授業実践(H16)より)

2 問題意識を高める学習課題の設定〔視点2〕

(1) 追究するための必然性が生じるもの

第1次から第2次にかけて、干拓の歴史や干拓が始められた背景について取り上げた。

本校区の生徒は、小学校の総合的な学習の時間で干拓による地形の変遷について学習をしてきている(写真C)。また、本校の第1学年総合的な学習の時間「ふるさとの歴史を知ろう」の単元では、潮害と闘いながら干拓事業を進めてきた先人の苦労や願い等について現地調査を通して学習している(写真D)。

そこで、これまでに見たことのある地形図や

干拓施設の写真を提示し、既習内容との関連を図った。江戸時代の新田開発に伴い、米の生産量が大幅に伸びたこと、昭和時代では米の増産、自作農創設、農地拡大を目的に大規模な国営干拓事業が進められたことについて理解を深めていった。

① 米の増産が目的であったはずなのに？

第3次では、昭和時代、国営干拓事業が完成した後の市の様子について考えさせるために、2枚の地形図を提示した（資料5・6）。

そして、「干拓後、地域の人々の生活はどのようになったといえるか」と問うた。生徒たちは、これまでの既習内容と二つの地図との関連から、「地域の人々の努力がようやく報われ、思い切り農業に専念できるようになった」「国営干拓事業で土地がさらに広がり米の生産量が大幅に増加した」といった効果について述べていった。しばらくして、ある生徒が「米の生産量が増加したというのはおかしい。干拓地の地図記号は畑になっているので、干拓後はイチゴやトマトで潤っていったと思う」と発言した（写真E）。この発言をきっかけに、「干拓は米作が目的だったはずなのに」「なぜ干拓地は全て畑



●写真D / 「堤防の上と下の構造が違うのは、潮害で崩壊する度に工法を変えて修理したためです」



●写真E / 「地図記号を見ると、干拓された土地は田ではなく畑になっています」

なのか」という疑問を強めていった。そこで、「米の増産を目指して干拓が進められたのに、なぜ干拓の完成直後、畑作が広がっていたのだろうか」という学習課題を設定した。

その後、生徒は国営干拓事業後の様子や当時の農家の思いについて、図書室の郷土資料で調べていった。国や県の政策で、塩害の被害を受けやすい畑作への転換を余儀なくされた農家の苦勞について理解を深めていった。

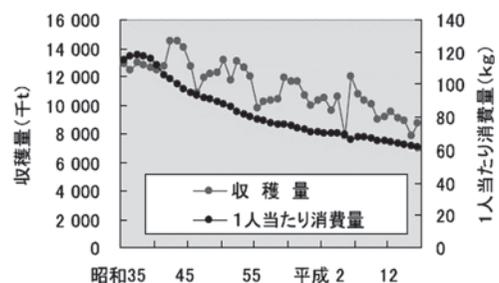
教師からは、米の収穫量と消費量の推移（資料7）を提示し、生産調整が進められてきた背



●資料5 / 国営干拓事業の着工（昭和35年頃）



●資料6 / 国営干拓事業の完成（昭和58年頃）



●資料7 / 米の収穫量と一人当たりの消費量の変化（農林水産省「米の需給の変遷」）

景について考えさせた。生徒たちは、「農業機械の導入により米の生産量が急激に増加したため米が余るようになった」「食文化の欧米化により米よりパンを食べる人が増え、米消費量が減ってきた」等、考えを交流するなか、政府が新規の開田禁止や転作の政策を進めていったことをとらえていった。

② 生産調整のなか、なぜ米作りが広がったのか

第3次の2時間目では、現在の土地利用を示した地図（資料8）を提示した。生徒たちは、「米作りが広がっている！」「干拓直後は生産調整で畑だったはずなのに」と驚きを示した。そこで、「米の生産調整が進められてきたのに、



●資料8 / 現在の干拓地の様子（平成20年）



●写真F / グループでの交流

- a : 「生産調整が緩められたからじゃない」
 b : 「もともと米作りをするために県内から農家の人が入植したのだから、生産調整が緩めば当然米を作り始めるはずだよ。」
 a : 「ほら、資料に、『米の生産調整が強化される一方で、休耕田や耕作放棄地の問題が大きくなり始めた。このような状況のなか、制度が大幅に変更された』と書いてある。やっぱり生産調整が緩められ、農業がしやすくなったんだよ。」
 c : 「米以外にイチゴ作りも盛んだし、ある程度自由に農家の判断で仕事ができるようになってきたと思う。」

●資料9 / グループ内の意見

なぜ干拓地では米作りが広がっているのだろう」と問い、農林水産省による生産調整に関する資料を提示した。生徒たちは、資料から生産調整の制度が変更になった事実と米作りの広がりに関連づけながら考えを交流していった（写真F）。また、干拓後、米作りを県が特例として認めた事実にあふれることで、畑作農家の塩害による被害の大きさをとらえさせることができた。終末で、生徒Cの「農家の判断で仕事ができるようになった」という考えを取り上げ、干拓地の農地としての効果的な活用について確認した。

(2) 既存の知識や経験を生かしながら追究できるもの

第4次では、玉名市農業委員会、熊本県農業普及・振興課より3名の方をゲストティーチャー（以下、GT）として協力をいただき、耕作放棄地の実態についてお話をいただいた（写真G・H）。これまで干拓による農地の拡大を農業の発展としてとらえていた生徒たちは、荒廃した農地が急激に増加する市の現状を知り戸惑いを示した。ある生徒は、「干拓で得られた広大で肥沃な土地をベースに、市の農業の発展が続いていると思っていたが、深刻な問題が増えつつあり驚いた」と感想を示した。

第4次の2時間目には、本校に隣接する耕作放棄地を見学した（写真I・J）。見学後、「学校の隣は、ただの空き地と思っていたが、耕作放棄地だということを知り、この問題をとても身近に感じた」と述べる生徒もいた。互いに見学の感想を述べ合うなか、生徒たちは次のような耕作放棄地の影響を考え、将来への危機感を高めていった。

- 食料自給率の低下 ○産業廃棄物等の不法投棄の増加
- 病害虫の発生 ○農地としての再生不可
- 有害な鳥獣の侵入・繁殖 ○景観の悪化

3時間目には、耕作放棄地の分布図や見学を通して把握できた玉名市の耕作放棄地の実態を



●写真G / GTの活用



●写真H / 玉名市の耕作放棄地の分布(緑・橙・赤:耕作放棄地)※緑→橙→赤の順に土地状況が劣悪



●写真I / 校区の耕作放棄地 ●写真J / 耕作放棄地の見学

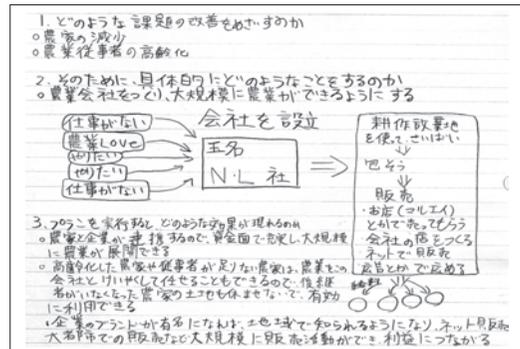
整理し、「干拓事業は農業の発展をもたらしたのに、なぜ耕作放棄地が増えてきたのだろう」という学習課題を提示した。そして、GTから配布していただいた統計資料を活用し、耕作放棄地増加の原因となるものを次のように整理した。

- 農業産出額の減少
- 農業経費の増大
- 農業従事者の減少と高齢化

続いて、第5次では、「玉名市の耕作放棄地の再生プランを考えよう」という学習課題を設

定した。この学習課題の解決においては、これまでに収集した資料や新たに収集した資料(農家の方への取材メモや新聞記事等)、既習内容などを総動員することで追究が可能になる。プラン作成に当たり、まずは、前時に整理した三つの耕作放棄地の原因のなかから改善すべきものを選び、個人でプランのアイデアを考えさせた。

次に、アイデアの内容ごとにグループを編成し、改善すべき課題(耕作放棄地の原因となるもの)、プラン内容(具体的な改善方法)、プラン実行の効果について検討し、班ごとに耕作放棄地再生プランをシート(資料10)にまとめさせた。



●資料10 / 生徒の考えた耕作放棄地再生プラン「農業会社設立プラン」

3 生徒相互の交流を促す学習活動の工夫〔視点3〕

第5次の4時間目に、三つのグループから提案された耕作放棄地再生プランについて学級で検討した。

(1) 教材・教具の提示方法の工夫

話し合いの媒介物となる資料を事前に確認し、ビデオプロジェクターによって提示した(写真K)。

各プランの説明の際、農業産出額の低下、農業者の高齢化、農業経費の増大等に関する資料を示させ、プランがどの事象を改善するのかを明らかにさせた。さらにプラン名、プラン内容、プラン実施の効果を黒板に整理して提示し、各プランの特色が伝わりやすいよう工夫した(写真L)。



●写真K / 資料の説明をする生徒



●写真L / 各プラン内容を整理して提示

(2) 個や集団の思考を深める場の工夫

生徒同士の互いの顔が見えるように机を配置し、全体での話し合いを行った(写真M)。本時で取り上げるプランについては、着目した原因が異なる下の三つのプランを事前に選んでいた。

- 農業経費の増大→サツマイモ栽培プラン
- 農業者の高齢化→農業会社設立プラン
- 農業生産額の低下→米粉パン生産拡大プラン

交流の場では、最適なプランの一つ選ぶのではなく、プランのランキングについて話し合わせた。その結果、プラン内容の良し悪しではなく、各プランの有効性や問題点について多様な視点や立場から検討させることができた。

(3) 教師の見取りに基づく支援

本時が単なるプランの発表会にならないように、事前にそれぞれが考えたランキングから、対立する考えや論議になりそうな考えを教師が見取り、本時で取り上げるようにした。

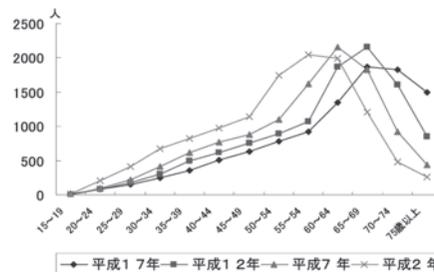
農業会社設立プランの班は、農業従事者の高齢化(資料11)が最大の原因だと考え、若手の農業経験者を中心とする農業会社を設立し、大規模で効率よく利益を伸ばすプランをまとめた。前時の意見・質問シートからは、このプランに賛同する生徒が多かった。その中で「農業

会社は高齢化の問題を改善できるかもしれないが、競争に勝てない個人農家は特色を生かすことができない」と意見を書いた生徒がいた(資料12)。この生徒の考えは農業を営む両親の話が根拠となっている。そこで、この考えを話し合いで取り上げた(写真N)。彼女は、父親から聞いた話をもとに、「個人農家の手間をかけたこだわりは、大企業にまねできないものがあり、そうした特色を出せることに良さがある」と述べた(写真O)。この発言に続き、「大規模経営が広まったら、価格や生産量の競争で負けて、仕事ができなくなる心配が出てくる」と、このプランの問題点を指摘する意見が出てきた。一方、このプランを主張する生徒は、「会社に入れば安い外国産に対抗できるし、自給率のアップにつながる」と反論し、価格競争での強さと持続性の良さを主張した(写真P)。ここでの交流は、地域の生産者に寄り添うことの意味について再考する場になった。

このようにして、各プランの有効性や問題点を検討するきっかけをつくり、個々の考えをとりえ直させていった(資料13)。



●写真M / 全体での話し合い



●資料11 / 農業従事者の年齢構成の推移 (玉名)

(農業会社設立プラン) 班への意見や質問

農家の高齢化や減少を改善するという点では効果が高いと思う。しかし、企業との競争に勝てず、個人農家のよさが生かされなくなるとも思わない。

●資料 12 / 農業会社設立プランへの意見



●写真 N / 「シートに農業会社設立には反対だって書いていたよね」



●写真 O / 「個人農家の良さがあります」



●写真 P / 「安い外国産に対抗できます」

- サツマイモ栽培プラン・・・有効性「低コストで手軽に栽培」、問題点「育てるやりがいや楽しみが薄い」
- 農業会社設立プラン・・・有効性「大規模経営で負担減」、問題点「成功している個人農家が生き残れない」
- 米粉パン生産拡大プラン・・・有効性「珍しく消費者に受ける」、問題点「人気は一時的で慣れると売れなくなる」

●資料 13 / 取り上げた各プランにおける有効性と問題点

V おわりに

1 成果

資料 14 は授業を終えての感想である。干拓事業の目的や農業方針の転換等の学習を通し、地域の人々の協力や苦労について関心を深めていることがうかがえる。

資料 15・16 のシートを見ると、1位のプランは共通だが、理由については、Aは生産者、Bは消費者の立場で記述しており考えが異なっている。このように解釈の異なる考えに出合わせることで個々の考えを振り返る契機となり、交流場面で問題意識を高めることにつながった。

資料 17 では、農業委員会からの評価により、

僕は、小学校で干拓工事の際、高潮で多くの村人が犠牲になったことを学習し、抹自身自身、負担い保存会にも入っていたので干拓事業のことは、詳しいのでした。でも干拓は、米の自作農倉庫建設や食糧増産、失業対策など様々な問題を改善するために行われたことを初めて知りました。また、干拓完成後は、生産調整により、農業の方針が変わり農家の人々は、工事の苦勞が報われず、現在の安定した農業になるまでは、大変だったろうと思いました。この学習を通して、干拓事業と横島町の結びつきについて新しい視点から考えることができてよかったです。

●資料 14 / 授業の感想

○「米粉パンの生産拡大とPRで、耕作放棄地を再生しよう」プラン ()

3 そのようなランキングにした理由を説明しなさい。
(「農業生産額」「農業経費」「農業従事者」の3つの言葉は必ず使うこと)

①位の米粉パンが売れば、米の生産額が増えるだろうと思う。
③位のサツマイモ栽培では、産量経費の面では、いいのかもしれないけど、
②位の種類の野菜を作った方が、育てやすい(労)があると思う。
②位の農業会社では、いろいろな職業や立場の人が参加できるので、産量
従事者が増えると思う。

●資料 15 / プランのランキング (生徒A)

○「米粉パンの生産拡大とPRで、耕作放棄地を再生しよう」プラン ()

3 そのようなランキングにした理由を説明しなさい。
(「農業生産額」「農業経費」「農業従事者」の3つの言葉は必ず使うこと)

米粉パンは、新しい発想で、今までにない不思議な物を作ると、コストが抑えられ、農業生産額が上がると、農業者が若者が増え、
が、安いサツマイモ栽培の方が、農業経費は安く、簡単に増える。

●資料 16 / プランのランキング (生徒B)

身近なことについて自分たちで考えていく干拓業は
とても楽しかった。今後は自分たちのプランのアイディアには自信があつたけど、農業振興課の方から「ずっと続けられることが必要だ」という言葉も聞いたとき、もっと多くの視点から考えることが大切だと思った。今度、身近なことについてプランをつくる機会があつたら、もっと広い視野で考えるようにしたい。

●資料 17 / 授業の感想

